

第3回

全一的日本精神の 一つの相

大辻 永
茨城大学教育学部准教授

はじめに

教科書の復刻が、相次いでいる。

『小學國語讀本』（「サクラ讀本」昭8（1933））

『尋常小學算術』（「緑表紙」昭10（1935））

『自然の観察』（昭16（1941））

などである。これらは大正自由教育運動の成果でもあり、学習者本位の指導を構築しようとしていた「伝説の教科書」として最近注目を集めている。算数の所謂「緑表紙」は、当時の国際数学会議でも絶賛され、保護者も争って買い求めた。この「緑表紙」と理科の『自然の観察』の創作に携わったのが、塩野直道（1898-1969）という文部官僚である。『自然の観察』の「編集に中心にかかわったのは、当時の文部省図書監修官岡現次郎先生であった」という指摘もあるが、実はそれだけでは言い尽くせない。詳細は省くが、岡自身も「塩野直道氏が総説を、私が各説をまとめた」と告白している（『復刊自然の観察』p.533岡現次郎）。

自然の観察

「サクラ讀本」, 「緑表紙」に続いて文部省が改革に着手した『自然の観察』は、小学校1~3年の低学年理科に相当する。低学年理科が始まったのも、この時の改革の特徴の一つであった。しかし、「教科書の上で指導するようなことに傾きや

すく、かえって悪結果を生ずるおそれがある」ことから（『復刊自然の観察』p.57総説）、取って児童用教科書は作らず、教師用指導書のみ作成された。前提に捕らわれない、大胆な発想である。

『自然の観察』は学習者本位に設計され、内容は当然子どもの発達段階に沿っている。感覚的/全体的直観を重視し、比較/全体的/継続的観察を行い、「科学的精神」や「合理的精神」、創造性を養うまでを目標にしている。

しかし、これを理科の視点からのみ言及するのでは不十分である。国民学校と共に登場し、新しい教科・科目の体系の中で考えられたものだからである。この体系を考えたのも塩野であった（「教科」という用語を作ったのが、そもそも塩野だという説もある（『随流導流』pp.126-7永田義夫））。

一源同体異相論

国民学校制度に当初反対していた塩野であったが、以下のような「一源同体異相論」に落ち着き（昭和15年頃）、省内での改革を牽引していった。それは、「一切のものごとは1つの根源から発し、全体として1つのものであるという見方考え方」であり、「異なって見えるものごとでも、それは全一体の異なった相に過ぎない」。そして、「この相は、時の流れに伴って変化」し、「相と相の間の対立抗争と見えることも、『全一的なものの調和発展のすがたに外ならない』。『また人間については、『遠い過去から無限の将来に連続するところの世界人類という一大生命体であって、その本性は生命の維持と発展にある』』とする（『随流導流』pp.289-290島田喜知治）。

中学校教育フォーラム10秋号で取り上げた橋田邦彦は、ちょうどこの頃文部大臣に就任する（在任期間：昭和15年7月22日から昭和18年4月20日）。橋田の思想を理科の塩野らしく咀嚼している、と解釈することも出来よう。また、国民学校は、他国に依存せずに（実のところできなくなった）我が国独自の教育制度を確立しようとしたものであった。後の歴史の目からすれば戦争色を読み取ることになるが、「日本人の養成」という一つの目的のために、学科という呼び名を廃し「教

科」として国民科、理数科、体錬科、芸能科（高等科には更に実業科）の4本を立て、理想を実現しようとしたものであった。理数科の柱であった「科学的精神」を、塩野は他「教科」を視野に入れつつ次のように言う。

「科学的精神を正しい位置に位置づけ、正しい働きを促すにあるのみ。即ち科学精神は全一的な日本精神の一つの相であつて、道徳的な相や芸術的な相と並び、しかも画然と分かつことなく、常に、中核をなすもので貫かれてゐることを確認すべきである。かくして、国体に対する信念、国民的情操、科学的精神等が国体の異相をなし、それらにそれぞれ磨きをかけられることによって、全一的な日本精神は益々光輝を増すのである」。(塩野 1941, p.105)

この「一源同体異相論」は国民学校令が施行された昭和16年に広まったが、後に塩野が教職・公職追放される口実にもなってしまった。

橋田邦彦と塩野直道

塩野の思想と実践には、確かに橋田邦彦の影響が見て取れる。いくつか例示してみよう。

「小学校低学年は」[主客未分化の時期であるから、動物を見ても自分たちと同じように考え、その生活を判断する]。(『復刊自然の観察』p.51総説)

「科学精神、科学する心の具体的な表現の仕方は、それは物事の筋道、ことほりを體し、その筋道、ことほりに従つて新たなものを創り出す、さういふ心です」。(塩野 1941, p.62)

「日本では、道を弁えたならば、どこまでも、それを行わずるのでなくてはならない。知つて行い、行って知り、知らず識らずに行うという知行一如の境地に達する修練をさせなくてはならない」。(『随流導流』p.139)

「本来我が國に於ては、教学一如である」。(塩野 1941, p.97)

しかし、「橋田の思想を従順に教科書に具体化

したのが塩野や岡だった」とも単純には言い切れない。「さすがの橋田さんも塩野さんにはかなわなかつたらしい」といううわさ(『随流導流』p.290島田喜知治)もあつたほど、塩野は省内で大きな影響力をもつていた。

おわりに

塩野直道については、科学教育の場でまだまだ掘り起こす必要がある。現在の理科教育を語る時、戦後からスタートしてしまうのではなく、もっと遡つて先達の貢献に配慮しなければならない。

後に塩野は次のように言っている。「先生方ひとりひとりが…(中略)…何をめがけて教育すればよいか。それには、どんなことに焦点[を]において指導すべきであるかを、しみじみ考えられるようおすすめする。…(中略)…まず第一に先生自身が、考える態度、考える姿勢をとられることである。教え込むというのではなく、子どもといっしょに考えるという態度でのぞむ」(塩野1969)。俱学俱進。10春・10秋号をもう一度参照してみたい。

「心」を無視しない「人間性の開発」を常に念頭に置いていた塩野は、考える手立ても示してくれている(松宮2007, p.43)。

- 一、問題を持ち、正面から取り組むこと
- 二、問題の本質をつき、そこから出発すること
- 三、少し読み、多く聴き、最も多く考えること
- 四、外權威に盲従することなく、内独善に陥ることなかれ
- 五、所詮は流れに従う外はないが、流れに従いながら流れを導く気概をもつこと

塩野直道

【参考文献】

- 『復刊自然の観察』(1941)農文協, 2009.
 松宮哲夫, 2007, 『伝説の算数教科書<緑表紙>塩野直道の考えたこと』岩波書店.
 塩野直道他, 1941, 『科学教育の基礎』日本文化研究会.
 塩野直道, 1969, 新学習指導要領の実施を前にして, 『日本数学教育会誌』51(6), 69-74.
 『随流導流: 塩野直道先生の業績と思い出』新興出版社啓林館, 1982.